

幕末の蘭方医高橋景作にみる教育と学問の軌跡

関 巴

Academic and Educational Achievement of Takahashi Keisaku,
a Ranpo Doctor, Who Studied Western Medicine at the End of Edo Period.

SEKI, Tomoe

キーワード：蘭学研究 蘭方医学 学問 教育 蘭学塾

1. はじめに

『高橋景作日記』という本がある。(金井幸佐久編 景作日記刊行会 1995)。日本の僻地に生きた、幕末の一蘭方医である高橋景作 (1799～1875) の書いた、1839年 (天保9年) から1874年 (明治7年) までの日常の記録である。この日記を分析することによって、当時の一般庶民の日常生活のみならず、西洋の学問がどのようにして日本の社会に広まっていったか、その方法についても知ることができる。

しかも、当時の日本の農村社会や、その中で地域の診療にあたった、医師たちの生活をも知ることができる貴重な記録である。さらにこの日記は、幕末の社会情勢や、医療の実態、庶民の生活などをつぶさに教えてくれる、非常に興味深いものである。そこで、小稿では、その分析の序章として、日記の主、高橋景作をはじめとする、その地域、上州吾妻の蘭方医たちの学問や教育の方法について考察していく。

ところは、当時上野といわれた吾妻郡中之条一帯の地域である。この地域に、蘭方医が多く現れることになったのには、時代の先駆者、幕末の蘭学者であり、蘭方医である高野長英 (1804～1850) の影響が大きいといえる。高野長英を語ることなくして、吾妻の蘭方医を語ることはできない。

今から200年近くもの以前、上州の僻村に、蘭方の医師たちが多く存在したということは、驚異的なことである。いまここでは、これまでほとんど姿を現すことのなかった、高野長英の門下である吾妻蘭方の医師たちが、どのような方法で、どのような学問と努力を重ねてきたのか、その門弟、高橋景作を中心にみていきたい。

2. 時代的・歴史的背景

高野長英が、吾妻の医師たちとかかわりをもつようになったころの、日本国内の社会情勢をみると、教育の面においては、主に漢学 (儒学)、国学 (和学)、洋学 (蘭学) などに分かれていたが、それぞれ研究者各自の主張する学説に基づき、藩学 (藩校)¹⁾ や、私塾などにおいてその門弟の教育にあっていた。しかし、「藩校が、ともすると官許の学問の枠を超えられないのに対して、私塾は、官に束縛されることなく、自由に新しい学問を求めていく。それは、官からみれば異学であった。」²⁾

こうした私塾は、多くは儒学が中心であったが、幕末になると、すすんで洋学を取り入れる塾が多くなってきた。ドイツ人医師シーボルト (1796～1866) の鳴滝塾^{なるたき}、緒方洪庵の適塾 (適々斎塾) などがそれである。これらは、本来は蘭方医学の塾として開かれたが、同時にオランダ語を教授する蘭学

塾でもあった。

また私塾は、教育内容だけではなく、教育の方法や学問の評価方式の改革にも取り組み、しかも門弟たちの等級を身分ではなく、学力検査によって定める³⁾という、いかにも近代的な視野に立った、進歩的な教育を実践していたのである。このような塾の中では、若者たちが精力的に学んでいく姿勢が、徐々に確立されていった。こうした、教育方式が、近代学校のさきがけとなったことは、容易にうなずけることである。

さらに当時の私塾は、藩校や、寺子屋などとともに注目すべき教育機関であり、一般的には教師個人の居宅を教室としたものが多く、その中で学問や技術、芸術などを、集まってきた門弟に教授する教育の施設であった。そこには、子弟の緊密な人間関係に基づいて、それぞれの教師がもつ、学派や流派の奥義を伝授することを目的とした教育があった。「子弟の人間関係を通しての人物育成という点で、私塾の教育はみるべきものがあり、ここに教育のありかたの原点として、たえず見直される理由がある。」⁴⁾と記されるゆえである。

これよりさかのぼって、教育の思想を考えるならば、そこに、貝原益軒(1630~1714)の教育思想を見逃すことはできない。益軒の教育思想は、種々の著書などに散見されるが、中でも『和俗童子訓』は、児童教育論としても有名である。しかし、かれの多くの著作において、なによりも注目すべきことは、学問の必要性について論じている点、また幼少時から、父母の子に対する教育の重要性を説いている点、さらに、親に対する子の尊敬の念を強調している点などにおいて、現代的な視点からみても大きな意味がある。時代を超えて受け継がれてきた教育思想が各時代を通して、多くの学者によって開花され、門弟たちに伝えられ、広く世の人々に波及していったことは、現代に生きる者として、重く受け止めなくてはならないことである。

益軒は、「人生まれて学ばざれば、生まれざると同じ。学んで道を知らざれば、学ばざると同じ。知りて行くこと能わざれば、知らざると同じ。故に人たる者は、必ず学ばざるべからず。学を為す者は、必ず道を知らざるべからず。道を知る者は、必ず行わざるべからず」(『慎思録』巻之一)⁵⁾と述べているが、これはそのまま、後にみる高橋景作の生き方、および学問に対する姿勢と同一のものといえよう。

一方、当時の社会的な世相をみると、幕府も諸藩も、経済的な窮乏をきわめ、農民は、租税の苛酷さと、貨幣価値の重圧に苦しんで、各地に打ち壊しなどの暴動が頻発しただけではなく、江戸、大阪では米騒動が起こったりもした。

このような、幕末の騒然とした情勢は、人々に生活面においても、思想面においても、大きな不安感といらだちを与えたことは事実である。そのため、精神的な安らぎを求めて、神仏を信仰し、その加護を得ようと巡礼の旅に出る民衆が多くみられた。旅は大衆的になり、神国に生きる者としての感謝の念は、伊勢参宮のならわしとなって、民衆に及んでいき、健康で旅ができることは、神仏参拝のおかげであり、ありがたいことであると考えられていた。

こうした旅は、単なる物見遊山ではなく、立身出世、子孫繁栄の基であり、人生の修行の場であり、さらには自己教育の手段でもあった。当時、旅をする中で、人々との出会い、会話や心の交流、人間同士のふれあいなどを通して、自己研鑽につとめたのであろう。教育という視野に立って考えるならば、現代に照らし合わせてみても実に興味深く、意味のあることである。

しかし、現実の世の中はといえば、前述のごとくすべてに騒然たる状況で、しかも、封建制度が厳しく、豊かな才能を持つ庶民の若者たちは、自己の才能を伸ばすためには、医師かあるいは、僧侶になることにしか、その道を見いだすことができなかった時代であったという。(屋代周二著『高野長英と群馬』による)

江戸時代後期における学問としては、医学はいうまでもなく、地理学、天文学、兵法、工技に至るまで、ほとんどが蘭学によって紹介されたのである。蘭学はもともと医学を中心に発達し、日本の西

洋医学は蘭学者によって、その道が開かれたといえる。そして、幕末における西洋医学の中心となったのは、江戸と長崎の地であった。

1823年には、先にあげたドイツ人シーボルトが、蘭館医として長崎に迎えられ、翌年、鳴滝塾を開設、多くの蘭方医を育てた。高野長英はその中の一人である。

このころ、外にあっては、フランス革命が起こり（1789年）、さらに進んで、1796年、イギリス船が室蘭に入り、同じ年、イギリスのジェンナーが牛痘種痘法に成功した。そしてそれは、ナポレオン台頭の年でもあった。

3. 中之条という地域の特徴

高橋景作をはじめとする蘭方医の多くを輩出した、群馬県吾妻郡中之条というところは、どのような土地がらであろうか。鶴の舞う姿をした群馬県を縮小した形ともいわれる中之条町は、群馬県の北西部に位置する、人口約17,654人（平成18年8月1日現在、町民生活課の資料による）、面積236.47平方キロメートルの町である。古く中世には、中ノ庄、また中条といい、江戸時代の初期、寛永初年のころには、市場町として栄えた。

地形についてみれば、面積の約8割を森林が占めているが、しかし、盆地、河岸段丘、丘陵地などと、変化に富んでいるという特徴をみることができる。

気候は、山間地で標高差があるため、地域的な格差はあるものの、山に囲まれた盆地状の地形であるため、内陸性気候となっている。特に、南部は比較的平坦で、古くから市街地が形成されるなど、この近隣の狭い範囲の地域のみでなく、広く吾妻郡全体の、政治、経済、文化、交通の中心として発展してきた。北部は、風光明媚な三国山系の高峰がそびえ、上信越高原国立公園に指定されている。（中之条広報による）

渋川から吾妻線で約30分ほどのこの町は、江戸時代に開かれた、四万温泉、草津温泉への客が必ずといっていいほど通る道筋になっていて、特に硫黄分の多い草津温泉の湯治客は、身体にしみついた、草津のぬるぬるとした薬湯を和らげるために、この地の温泉で体を休めたという。そうした中で、古い時代から、遠来の客人を暖かくもてなすという風土とともに、経済的余裕もあったようで、それが今に続いている。若山牧水をはじめとする文人墨客が多く身を寄せていたことからもうなずけることである。

先の大戦で空襲にあわなかったため、町の中を走る、国道353号線沿いの家並みは、わずかではあるが、古い宿場町の名残りをとどめている。この町は前述の、吾妻の蘭医と大きくかかわった、江戸後期の蘭学者高野長英が逃れてきたといわれる地でもある。その一隅に高橋景作の生地、横尾村がある。

4. 高野長英のこと

高野長英については、「蛮社の獄」⁶⁾ではよく知られているが、高橋景作をはじめとする吾妻の蘭方医たちとともに、上州にゆかりの深い人物であることはあまり知られていないようである。天保年間に何度も上州を訪れているが、それは、かれに学ぶ医師たちが上州吾妻には多くいたからである。

奥州水沢藩の武士の家の三男として、1804年（文化元年）に生まれた長英は、17歳で江戸に遊学して、蘭方医学を学んだ。後に長崎へおもむき、評判の高かったシーボルトの鳴滝塾で勉学に励み、鯨の生態の研究により、シーボルトからドクトルの称号を受け（1826年）、さらに翻訳教授に任命された。屋代周二氏（『高野長英と群馬』）によれば、シーボルトは、1861年（文久元年）3月12日（火）の日記に、「長英は、わが門下生の中で最も優れた人物だった・・・」と書いているという。

しかも、長英の研究は医学のみにとどまらず、西洋の歴史や地理などとともに、博物学にもおよ

び、当時の世界の情勢について進んだ知識をもつようになった。いわゆるシーボルト事件をさけるために、長崎を去った長英は、途中各地で講筵を開きながら2年がかりで江戸へ帰った。1835年（天保6年）のことである。ここにおいて、28歳の青年蘭学者高野長英は、麴町に蘭学塾「大観堂」を開き、医学書の翻訳や著述に没頭し、弟子の教育につとめた。

このころ、吾妻の沢渡温泉では、福田宗禎（1791～1840）が旅館経営のかたわら、医師として患者の診療に当たっていた。土地の名医として知られた宗禎も患者の治療に苦悩する中で、蘭方医学の効を知り1831年（天保2年）、長崎留学から帰った長英を自宅に招いて蘭学の手ほどきを受けた。この時期に、吾妻郡に蘭学の花が開いたのは、福田宗禎、柳田鼎蔵（1795～1835）、高橋景作らがその門をたたいたことによるのである。長英に師事したかれらは、医学を通して科学、政治、思想などについても学ぶことになった。こうしたことから、吾妻の医師たちは、長英の学恩に報いるために、その後も物心ともに身を挺してそれにあたったのである。

しかし、後に長英は、その著『夢物語』によって、「蛮社の獄」といわれる災禍にあい、江戸小伝馬町の大牢に投獄され、永牢の刑（終身禁獄）を受けることになる。1839年（天保10年）12月19日、長英36歳のときであった。それは当時、蘭学の発展に反感をもつ一派の策動による、シーボルトと、蘭学者への弾圧であった。長英の投獄については渡辺崋山との出会いが大きく影響しているが、ここではそれへの言及はさけることにする。が、しかし崋山もその著『愼機論』によって投獄され、自ら命を絶っているのである。

長英は、6年の入牢の後脱獄し、厳重な幕府の追求をかわしつつ、各地を潜行しながら、その間も筆を捨てることなく著訳を続けた。その潜行の時に、吾妻の蘭方医たちの助けを借りることになったのである。当時いわば、犯罪者（火付け脱獄囚）長英を守り抜いた、この吾妻の医師たちの身を賭しての、真剣な生き方をここにみるることができる。この間の経緯については、吉村昭の小説『長英逃亡』に克明に描かれている。

長英は、約6年にわたる潜行生活ののち、薬品で面相を変えてまでも、江戸において医業を営みながら翻訳に従事した。しかし残念ながら、その翻訳があまりにも巧みなことから足が付き、1851年（嘉永3年）10月30日、幕吏に捕らえられ自害した。時に長英47歳であった。

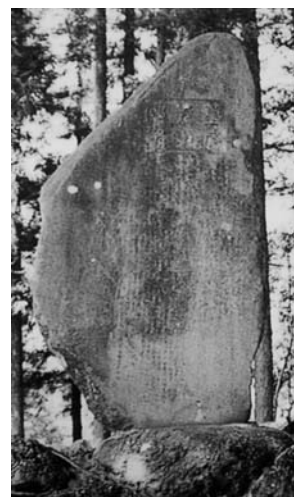
5. 高橋景作

長英の塾で蘭学を学ぶことになった高橋景作は、次の碑文からも知ることができるように、学力優秀な塾生であったと伝えられている。帰郷して後には、農業と医療とを兼ねて、時には地域の名主をも勤めながら、蘭方による診療を熱心に施し、郷土のために力を注いだのである。

① 碑文からみる高橋景作

高橋景作についての幼少時の記録は、特に改まったものは見あたらず、その生涯、学究活動などの軌跡は、かれが書いた39歳からの日記により知ることができる。またかれの経歴、人となりについては、そのほとんどが言い尽くされていると思われる文がある。景作没後26年たった明治34年、門人たちによって建立された地元吾妻神社の境内にある追悼の碑文である。

「筥庵先生追遠碑」（町指定重要文化財・町指定史跡）と題する、碑身261センチメートル、台石125センチメートルの大きな碑がそれである。



筥庵先生追遠碑

景作を知る手がかりの一つとして、そこに書かれたごく一部を次にあげてみよう。

碑文

「上毛吾妻之郷 山水明媚 而其靈秀傍碑之氣 鐘而出希才之彦 者有焉 篁庵翁蓋其人也 (略)
翁姓高橋氏 諱盈 小字景作 又曰若仲 篁庵其号 考諱政房 称四郎右衛門 妣福島氏
翁其長子有二弟 各出嗣他姓 有妹夭 上野吾妻郡 横尾村人 家世服農 先人為里正
土地之名族也 翁生奇岐慧敏 幼好讀書 俛焉日有孳々 稍長狷介敦篤 性至孝 善事爺
孃 学該和漢 涉獵百家以至詩歌・文・俳 翁初就伊藤鹿里 学儒医道 後遭高野長英來
游 又師事之 專問蘭方 已而高野子 入江戸寓于麴坊甲斐坂 号大觀堂 翁亦追隨侍之
修業研精 自期垂帷於都会 時與塾友羽倉 小関等英士 提撕講究 互責匪懈 居歲餘
業大進矣 遂為塾頭 …… (後略) 」

明治三十四年辛丑十一月一日

州学士 松本盤桓留 撰並書

とある。読んでみると、

「上毛吾妻の郷は、山水明媚で、しかもその靈秀の気が集まり、奇才の人物を出す。篁庵翁は、けだしその人である。翁の姓は高橋氏、^{いみな みつる}諱は盈といい、小字を景作、また若仲ともいう。篁庵はその号である。父の諱は政房、四郎右衛門と称し、母は福島氏で、翁はその長子である。二弟があつたが、それぞれ他家をを嗣ぎ、妹は早死にした。上野の国吾妻郡横尾村の人で、家は代々農業を営み先祖は名主をつとめた名家である。翁は、生まれながら器用でかつ慧敏、幼時から読書を好み勉学にいそしんだ。やや長じては、節義を守って、徒に和合せず、真心をもって人に接し、大変親孝行で、よく父母につかえ、その学ぶところは百家にわたり、詩歌・文章・俳諧にまで及んだ。

翁は、はじめ伊藤鹿里について儒医道を学び、のち高野長英の来遊にあつて、師としてつかえ、専ら蘭方を学んだ。やがて長英が江戸に入り、麴町甲斐坂に寓して大觀堂と号すると、翁もまた追隨して修業研精し、大成の後には、江戸で開業しようとして期した。時に塾友には、羽倉、小関等の英士があり、互いに講究し相携えて怠りを責め、戒めあつた。ここにいること一年余り、学業大いに進み、ついに塾頭となる。(略)」

とあり、ここに景作の生い立ちと、その人となりの一端をうかがうことができる。

② 景作、師との出会い

a) 儒医道の師、伊藤^{ろくり}鹿里

高橋景作は、1799年(寛政11年)に群馬県吾妻郡中之条横尾村に生まれ、1874年(明治8年)77歳で没するまで、その青年期を、江戸文化爛熟時代に過ごし、高野長英という俊才な師に出会い啓発され、新しい医学の道に惹きつけられていった。それは、生涯をかけて地域の医療、教育に注がれたかれの情熱からもうかがい知ることができる。(景作日記にそれをみる。)

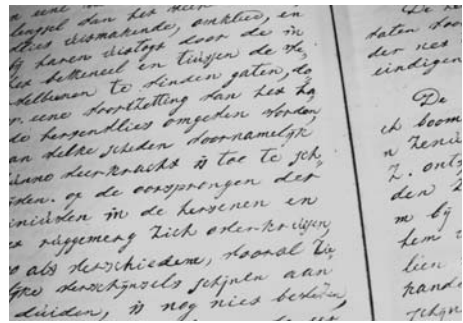
景作が、いつごろ、いかにして医学を学び始めたのかは定かではないが、はじめ、信州の伊藤忠岱鹿里⁷⁾について、古医方とともに儒学を学んだとされる。鹿里との出会いがいかなるものであつたかは諸説あるが、当時、鹿里は中之条方面へ蚕の種の買付けに来て、景作と出会ったという説がある。また鹿里から、中庸の講義を受け漢学を学んだといわれるが、しかし、どのようにして講義を受けたかの資料は見あたらない。ただ、1823年景作24歳のころ中之条伊勢町(横尾の隣町)に、中庸講義があつたとの様子で、そこに景作の名がみられるということで、このことをさすのであろう。(景作生家現当主高橋忠夫氏談)

景作の生家横尾の高橋家には、「書籍出入帳」なるものが所蔵されており、花岡青州、吉田長^{ちょうすく}門下の蘭方医木暮俊庵(1801~1867)が1827年、景作から吉益東洞の『医事或問』を借り、忠岱聞書の『傷寒論』⁸⁾を貸したという記録から、書籍の貸し借りを通しての学問もあったようである。さらに当時の貸借記録の中に、鹿里の古医方が医書の大部分を占めることから、景作のはじめの師は鹿里であったことが察せられる。こうして、景作が鹿里から学んだものは、後の蘭方医学の土台ともなり、患者の救済にあたっては、仁医たりうるゆえんのものであったと思われるのである。

b) 蘭方医学の師、高野長英

景作が、伊藤鹿里について医学を学んだ当時は、『解体新書』刊行からすでに50年近い歳月を経ており、医学界には蘭方医学が浸透しつつある時代でもあった。さらに前述のごとく、沢渡の福田宗禎が、高野長英を招いたことから、景作も古医方より、いっそう治療効果の高い蘭方を学ぶことになった。そこでは、他の医師たちとともに、洋学講義に、患者の治療に、薬草を探し求めては植物の採集に、そして通信教育を通して、翻訳の勉強にと向学心を燃やし続けたのである。

長英の塾「大観堂」の塾頭となった景作は、長英の著作を忠実に筆写することのできる、秀れた才能をもっていた。いわば、長英著訳の助手を務める役割をも果たしていた。長英著の『避疫要法』末巻には、それを物語るものとして「門人上毛高橋景作校」とある。また、長英の講演を景作が筆記したものとして、『各病療法記聞』、さらに、『蘭学繙巻得師(全)』というオランダ文法書があるが、この巻頭に、「拡充居先生⁹⁾口授、高橋盈若仲筆記¹⁰⁾とあり、長英が講義をした筆記録である。景作が長英の講義を教科書に作るだけの学力があったということであろう。景作の書いた整った字体とともに、長英の盛んな講義ぶりがうかがえるこれらの書物は、『和蘭文語抄』、『内科撰要』、『医薬聞方』、『疾医古書』などの景作訳著とともに、いまなお、横尾の高橋家に所蔵されている。



景作が書いたオランダ語

c) 歌道の師

景作のめざした医学とは直接関係はないが、かれは、現在の群馬県桐生市生まれの国学者で、万葉集の研究者として知られる、橋本直香(1897~1889)に師事し、歌道を学んだ。その他、特別な師がたつたわけではないが、漢詩などをよくし、多くの詩を残しており、

行末のあふせはいつと知られねば いとどかなしき今朝の別れ路

という和歌は、郷土史家金井幸佐久氏によれば、かくまっていた、師長英を、越後路まで送っていき、別れたときの心境を歌ったものであろうという。

6. 学問の方法

景作をはじめとする、吾妻の医師たちが、当時の僻村でどのような方法で学び、蘭学を身につけていったのかは、興味深いことである。

① 書籍出入帳 (文政9年から嘉永元年までの貸借記録)

上にもみたように景作の学問の手だての一つとして考えられるのが、「書籍出入帳」である。非常に読書家だったとみられる景作の遺品の一つに、「文政十龍集丁亥 春正月吉良辰 書籍出入帳」と

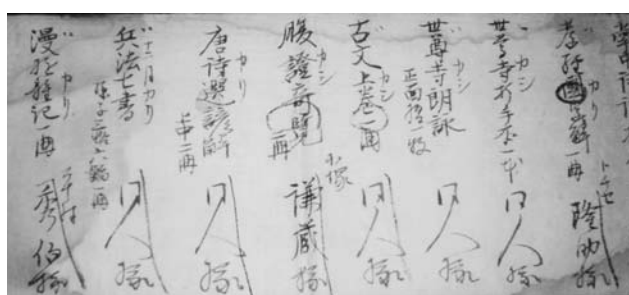
表紙のある、美濃版の貸借控え帳がある。その内容についての一部は、先にあげた伊藤鹿里に学んだ方法からもみることができる。

この出入帳には、1826年(文政9年)、景作27歳のころから始まり、1849年(嘉永元年)までに、景作の貸借した書籍名が克明に記されている。医書については、天保元年までは鹿里の古医方の系統が中心になるが、その他は、ほとんど医書外の書籍であった。たとえば、『百人一首』、『詩経』、『唐詩選』、『孝経国字解』、『老子』、『荘子』、『方丈記』、『兵法七書』、『俳諧古選』、『鎌倉物語』などの儒学書や国学書などで占められている。1826年(文政9年)には、吉益東洞著『薬徴』、『健殊録』などの古方派系医書を筆写するための貸し借りをした記録もある。

ところが、天保期にはいつてからは、この出入帳の貸借書籍の中に蘭学書が多く目につくようになる。『チットマン外科書』、『プレッキ外科書』、『内科選要5・6編写本』、『オランダ外科書』、『外科和欄陀書』、『客中病按』(長英著)、『医範』¹¹⁾などである。特に、景作が『医範』を所蔵していたということは、当時の若い医師たちの間に、蘭学医書を読みあうということが、一つの学問研究の方法として、この中之条地域に波及していったものと考えられる。このようにして景作は、若い頃から医学の道に入り研究を重ね、その上、オランダ語



書籍出入帳



書籍の貸借記録

を訳すことができる、すぐれた蘭方医でありながらも、儒学、国学、詩歌にも情熱を傾けていたのである。

さらに、書籍出入帳にみる本の貸し借りによっておこなわれる筆写も、学問の方法の一つだったと考えられる。当時版本は高価であり、なかなか買うことがむずかしく、写本をつくるが多かったのである。

② 講義を聞く、実習(みる)

沢渡の福田宗禎が長英を招いたことは先に述べたが、吾妻の医師が総出で出迎える中、福田屋旅館に着いた長英は、ここで、医師たちが蘭学を学びたいということ聞き、その方法について考えた。「医書が読めないで、読む力がほしい、それにはどうしたらよいか」というのが、かれらの一致した意見であった。長英はそれには何か医書があればそれを手がかりに言葉の意味などを説明しようと考えた。ゲッセル外科書ならあるという。ドイツ人ゲッセル(David von Gesher)の著したこの外科書は、オランダ語ではあるが、長英は言う。「文章は、文法を知らないと意味が理解できないが、単語さえわかればおよその意味はつかめる。だから、単語中心でやる」と。¹²⁾

ここで授業を再現してみよう。

a) 聞く

長英の授業について、井ノ川金三氏は、次のように叙述している。

授業開始である。「ターヘル・アルトミア」「ターヘルとは、台という意味。ものを安置するものをさす。ここでは、頭蓋骨の内側のこと。アルトミアは、図譜とか図鑑と訳す。この場合、ターヘル・アルトミアは解体図鑑。さあーみんなで、ターヘル・アルトミア。大きい声を出して」

「ターヘル・アルトミア」

「よし、次。ゾーフ・ハルマ。ゾーフとは和解のこと。つまり外国文を日本語になおすこと。ハル

マとは人名。ゾーフ・ハルマ。大きな声で」 「ゾーフ・ハルマ」

「次、ヘルニア。背骨を構成する骨と骨の間にある板が、背骨から飛び出ていることをいう。腰痛の原因のほとんどは、ヘルニアといってよい。長英はヘルニアを図解して説明した。¹³⁾

蘭学を学ぶことについて、翻訳は、漢字を読むのと同じようなもの、しゃべることはできないが訳すことはできるというのが長英の考えであった。それを裏付ける一節がある。長英が脱獄を図り逃亡の中で蘭書を手にしたときのことである。吉村昭著『長英逃亡』には、

長英は、目をかがやかせて、洋書のページを繰った。胸につかえていたものが、一時に噴き出すような感情の高ぶりを感じた。自分が生きていく意味は、蘭学にこそあるのだ、と思った。

清吉（牢内でいっしょだったが、解き放しのあと、逃亡を共にした）が、長英の異様な表情をいぶかしんで近寄り、

「これはどのような書物なのでございますか」

と、たずねた。

「オランダ書だ。プロシアという西洋の国の者があらわした書物を、オランダ国の者が自国語とした。それが、船にのせられて長崎につき、私の親しい友人が手に入れたのだ」

長英の顔は、上気していた。

清吉は、意味がわからぬままにうなずき、長英の手にした書物をのぞきこんだ。

「先生は、それを読むことができますか」

清吉が、長英の顔を見つめた。

「修行の末、読み解くことができるようになった。住む国が違えば口にする言葉も文字も異なるのが道理だ。私たちは、縦に字を書くが、はるか海の彼方のオイロパ（ヨーロッパ）の国々の者たちは横に書く。同じ人間の書くことであり、文字を習い、並び方の仕組みをおぼえれば、読むことも書くこともできる」

長英は、機嫌よさそうに言った。

「それが横文字というものですか」

清吉は、物珍しげにオランダ文字を見つめた。¹⁴⁾

とあり、生き生きとした記述である。

b) 実習、みる

福田屋旅館近くの、宗禎の診療所で解剖実験が行われた。手狭な診療所に木箱を手術台代わりにし、白衣を着てその前に立った長英を、取り囲むようにして医師たちが集まった。足に怪我をしている犬が運び込まれて、手術台に仰向けに固定された。当時、日本では解剖のことを「腑分け」といった。1754年（宝暦4年）山脇東洋が死刑囚の解剖をおこなったのがはじめてである。都会では珍しいこともない腑分けも、吾妻の医師たちにとっては、初めてのことであった。

前掲、井ノ川氏は、

長英は小刀を手にとると、手術をする手順と注意すべき点を述べた。病根を発見したときは、万全の注意をもって除去すること。その見極めが肝心であること。健康な臓器を壊さぬことが大切であること。手術中、患者の症状に異常がないか、脈拍、呼吸に注意すること等であった。

長英は手ぎわよく解剖して見せた。まるで魚を切るが如く・・・またたくまに腹を切開して、腸を見せた。医師たちは見落とすまいと、じっと凝視した。長英の解剖は、真剣勝負であった。犬ではなく、人間の外科手術と考えたからである。

「手術に成功するかしないか、生命が助かるか、助からないか、瀬戸際の勝負と心得よ。経験こそ、宝である。失敗をおそれては成功はおぼつかない。何度も何度も繰り返すうちに自信がつく」

「手術中、患者の悲鳴に驚いたり、多量の出血に慌てたりするようでは蘭方医としては失格。蘭方

医になる資格はない。辞めてしまえ！と言いたい。常に沈着冷静でなくてはならぬ」¹⁵⁾

と記している。事実がどうであったかは定かではないが、このような状況であったことは、十分に推測可能なのである。

こうして、長英の講義と実習は、吾妻の医師たちの目を開かせた。蘭方医学を学ぶには、外科手術を会得することが必要という長英の考えであった。それは、蘭方は、解剖によって病理を突き止めることにその原点があるということである。そしてこの洋学講義と実習のかたわら、自ら患者への治療も施した。こうした中で長英は、患者に対したときの医師の重要な心得を示しているのである。

また長英は、薬草の採取にも熱心で、吾妻に滞在中は、医師たちを伴い榛名山などへもしばしば出かけて行っては、その薬効について講義をしたという。

③ 通信教育

宗禎、禎蔵、景作は、長英の弟子になることができた。景作は江戸へ行って塾生として学んだが、宗禎や禎蔵らの、吾妻に残った医師たちは、医療上わからないことを手紙で教えてほしいと長英に頼んだ。ここに学問の方法の一つに、通信教育をみることができる。

その方法として、手紙を原町（吾妻町）の問屋場矢島俊司に託した。俊司は飛脚屋を営んでいて、麴町の飛脚屋と契約を結んでいた。俊司の飛脚が、長英あての手紙を麴町の飛脚屋に届ける。麴町の飛脚屋で、宗禎、禎蔵あての手紙があれば受け取り、これを宗禎、禎蔵のもとに届けるという寸法であった。麴町の飛脚屋の方も同じで、宗禎、禎蔵あての手紙を原町の飛脚屋に届けるという方法で、スピードアップを図っていた。飛脚屋は、現金の取り次ぎも行っていたので、謝金の受け払いも飛脚屋を通じて行われていた。¹⁶⁾

ここで飛脚についてみてみよう。江戸時代には、五街道や宿場が整備され、飛脚による通信制度が整えられた。それ以前に用いられていた馬は使われなくなり、飛脚は自らの足で走った。その種類を見ると、継飛脚（公儀の飛脚）、大名飛脚（諸藩）、町飛脚（町人も利用できる飛脚）などの制度があった。町飛脚は、民営の飛脚問屋、飛脚屋が走らせたもので、一般の武士や庶民が利用した。吾妻の医師たちが、長英との通信教育に利用したのは、この町飛脚であろう。

④ その他

景作らが直接かかわった教育ではないが、当時外国の医学を習得するための一つの方法として、伝えられていることがある。景作も、種痘の普及につくしたことは、後にのべるが、ジェンナーの発見した、牛痘法が、初めて日本に伝わったのは、1803年（享和3年）、長崎の通詞馬場左十郎がオランダ商館長ゾーフからそのことを聞いたとされている。

その後、文政年間に、北海道で注目すべきことが起こった。千島のエトロフ島で番人小頭の中川五郎治がロシア船に拉致されたのは、1807年（文化4年）だったが、五郎治はそれから5年間もシベリアの各地にとどまり、その間に牛痘法を習得した。1812年（文化9年）に帰されたが、函館に出張していた通詞の馬場左十郎は、五郎治よりロシア語を学び、五郎治が持ち帰っていたロシア語の牛痘書を1820年（文政3年）に訳して『遁花秘訣』と題したという。¹⁷⁾

このようにみると、教育、技術の習得、学問の方法には、種々様々な形態があるが、そこには、それをいかに受けとめるかという本人の意欲と能力、そして努力に負うところが大きいといえよう。

7. 景作の日記

景作の生家高橋家には、20冊に分けて綴じられた、かれの日記が大切に保存されている。それは、上質の和紙に書かれた、手のひらにのせれば舞い上がりそうなほどの軽い綴りである。しかし、そこには、激動の時代、政治、経済、農業そして、投薬や種痘など、診療の様子、自己の蘭学研究、和漢の古典研究が記されていて、景作の整ったきれいな文字とともに、重く心に訴えるものがある。

日記は、第一冊（天保九年・天保十年己亥）から始まる。景作時に39歳であった。この第一冊のみは表紙もなく、蔵の引き出しの奥に落ちていたものを昭和になって見つけたものである。他は一包みにして「永久勿失」と書かれ、明治以来蔵の梁につるされてあったという。（現当主高橋忠夫氏による）

日記は、長英が幕府批判のかどで永牢の判決を受けたその直後、天保10年12月25日から空白になっている。景作にとって、その落胆はいかばかりであったろうか、うかがい知ることができる。空白13年余、第二冊は、嘉永6年から「農蚕日記」と題し、養蚕の状況が細かく記録され、医業については、記述がない。たとえば、その年の日記には、

正月 廿八日曇 夜雨ふる 明方晴 今明日味噌練 注(味噌作りのこと)

2月 八日 麦ふみ

とある。

吾妻の蘭方医と連携して、脱獄した長英をかくまい、危険を覚悟で守り通した景作が、再び初心の医師に戻ったのは、長英自害後の1854年（安政元年）であった。

安政三丙辰年の、「日常記」と題する正月の日記には、

十日晴 伊勢町へ一件見舞いながら年礼 今日岩鼻より御検視 夜死人引き取りになる 夜少し雨降る 伊勢町半左エ門を診す 同町文助小児を見舞 注(検視は、「両足を縛られ、自殺とも見えず、検視願ひ上げ」と代官所の記録にある。他の二人は、往診である。)

十三日晴 風ありて寒し 中之条銀三郎を見舞ふ 伊勢町文助小児瘍ニ針をさす 注(小児の瘍はできもののこと。このあと何回か往診している。)

その他、1858年（安政5年）8・9月の日記には、コレラ大流行の様子が書かれている。急な腹痛による者が多くあり、度々往診に行っているが、死者も多数あったと記録している。コレラの予防法として、「桂支（けいし）、益智（やくち）、干姜（かんきょう）各等分三分づゝ日ニ二三度つゝ用」と書いている。薬草にも大きな関心をもっていたことがうかがえる記録である。

さらにこの時期には各地で牛痘接種が行われるようになり、景作は、自分も牛痘種を入手して、まず我が孫に接種した。この成功を期して、近隣一帯に種痘を実施した。かれは絶えず依頼に応じて診療に出かけていることが、日記から知ることができる。村人たちの尊敬と信頼を集めていた、蘭方医としての景作が、どのような医療を行っていたかの分析は、次の稿にまつとして、景作の医師としての信条をのべている一文を紹介しよう。

安政六年十月、門人山本泰庵著書の序を景作が書き、それには、

「聞ならく、医は仁の術なりと、夫仁と義とハ天下の上なき道にして、人の作り為せるものにあらざ、おのづからに然るものなり。

この故に天の命ずるこれを性と云ひ、性にしたがふを道と云と云ひ、また老子ハ道は自然より生ずとも言へり。されば医たらん者は能く人の性情は疾病を患いの第一とするを闡知りて他の病るをば己やめる如く真心もて、思はかりて、治を施すべきなり。 （後略）」¹⁸⁾

景作の、医は仁術、医は至難なもの、専ら誠をもってあたるべし、の信条をみることができる。しかもここには、医の道のみではなく、和漢に通じた景作の学問の深さをも知ることができる。

8. おわりに

上野の国、吾妻郡中之条において、幕末に蘭方医が多く輩出されたという史実を探りながら、その学問の方法に焦点をあて、高橋景作を中心にみてきた。それは、かれの、残した20冊の、長英投獄の間を除く23年間にわたる日記の物語るものが、何であるかを問うことに一つの意味がある。と同時に、この日記には当時の国内外の世情がよく現れており、その中でかれが、どのように学問の道を開いてきたかということにも興味があったからである。

小稿では、景作が学んできた学問とその方法について考察してきた。とともにかれの医療に対し、患者に対し、そして恩師長英に対する誠実な信条を、みることもできた。

晩年に景作は、医療のかたわらみずから寺子屋を開き、多くの子弟を教育した。その後、村に小学校を初めて設立するための指揮をとり、寄付もしている。

吾妻の医師たち、ならびに景作についての資料は少なく、先行研究はあっても、そのほとんどが同じ出典であったりということで、当初の計画を実現することは非常に困難であった。しかし、研究を進めていくうちに、幕末から明治にかけての内外の情勢とともに、それに追隨する日本の医療に興味をもつようになってきた。次の稿ではそのことを中心に、景作の日記が語る、当時の、社会情勢、政治、経済、医学、庶民の生活、などについて考察していきたい。

【注】

- 1) 藩校には、漢学中心の家塾や私塾を起源をもち、特に藩の直轄学校すなわち藩校として拡充整備されたものが多い。教育内容も次第に拡充され漢学のほか国学（皇学）などをおき、また、幕末には洋学や西洋医学を加えたものも多くなっている。（文部科学省 学制百年史「第一編序章一」幕末の教育 2006）
- 2) 山住正己『日本教育小史一近・現代一』岩波書店 1987 p.14
- 3) 前掲書 p.15
- 4) 名倉英三『日本教育史』八千代出版 1987 p.46
- 5) 貝原益軒著 伊藤友信訳『慎思録』講談社学術文庫 1996 p.175
- 6) 高野長英、渡辺崋山、小関三英等の蘭学者や、当時進歩的な学者たちの集団であった尚齒会に対して、スパイを潜入させ、幕府の政策に反対するこれらの人々を弾圧した。時に天保10年であった。
- 7) 伊藤祐義字忠岱号鹿里（1778～1838）は、長野県佐久郡に生まれた古医方の医師である。早くに儒学を修めて人を導くことを思い、江戸一流の儒者太田錦城（1765～1825）に入門修学につとめた。『傷寒録国字解』を著し、筆写本1,500冊が残っている。（金井幸佐久編『高橋景作日記』景作日記刊行会 1995）
- 8) 古医方最高の古典として知られる。
- 9) 高野長英のことである。
- 10) 小林文端『長英門下高橋景作伝について』群馬文化第4号 1957 p.9
- 11) 『医範提綱』のこと。この書は文化2年に、宇田川榛斎の手で刊行されたもので、西洋医学を学ぶ者の規範として貴重な書であった。（丸山清康『群馬の医史』群馬県医師会 1958 p.138）
- 12) 井ノ川金三『高野長英と吾妻』月刊上州路 あさを社 2000 8月号 p.55
- 13) 前掲書 p.57
- 14) 吉村昭『長英逃亡 上』毎日新聞社 1984 p.131～p.132
- 15) 井ノ川金三『高野長英と吾妻』月刊上州路 あさを社 2000 8月号 p.57～p.58
- 16) 前掲書 9月号 p.76～p.77
- 17) 渡辺竹雄『地方文人の生活と思想』創研出版 1989 p.32～p.33
- 18) 金井幸佐久編『高橋景作日記』景作日記刊行会 1995 p.183

〔上記以外に参考にした文献〕

- 『日本思想大系』55 岩波書店 1971
『日本思想大系』34 岩波書店 1970
金井幸佐久『吾妻郡教育史』上毛新聞出版局 2003
金井幸佐久『高野長英門下 吾妻の蘭学者たち』上毛新聞出版局 2001
田崎哲郎『在村の蘭学』名著出版 1985

新村拓編『日本医療史』 吉川弘文館 2006
屋代周二『高野長英と群馬』 あさを社 1977

[付記] 小稿投稿直前に思いがけない論文の所在を知った。

「PRACTICAL PURSUITS Takano Choei, Takahashi Keisaku ,and Western Medicine in Nineteen-Century Japan」 Ellen Gardner Nakamura Harvard East Asian Monographs 255

というのがそれである。今回、小稿にそれを反映することはなかったが、日本以外でも上野の国吾妻における、姿の見えなかった蘭方医が論文として取り上げられていることに、改めて心を打たれるものがある。今後、この論文を参考にするとともに、諸賢の教示を得て続稿を発表することにした。

なお、景作生家、現当主の高橋忠夫氏をはじめ、中之条の歴史民俗資料館、群馬県立文書館、群馬県地域文化研究協議会事務局、群馬県医師会の方々にお力添えをいただいたことを付記し感謝。

(受理日：2007年2月28日)